

# 河川

11

November 2020  
No.892

特集

今後の多自然川づくりが目指す姿



忠別川：北探都あさひかわ（北海道旭川市）

## 流水の世界をのぞきながら

While Looking into the World of Running Water



かな川水辺の楽校運営協議会

かけがわ ゆうこ  
会長 掛川優子\*

KAKEGAWA Yuko

### 1. はじめに

今は30歳を過ぎた長男が入った幼稚園には、母親のサークルが幾つもあり、私はそれまであまり関心のなかった水質を学ぶサークルに入り、水生昆虫を知ることになりました。ここで知り合った母親仲間と川底に住む虫たちを眺めているうちに小学校にゆとりの時間が導入され、長男の通いだした小学校から声がかかり、自然環境を考えるクラブで子供たちと川へ通い、興味尽きない流水の世界を一緒にのぞくようになりました。しだいに多自然型川づくりや希少生物保護などにも関心や活動は広がっていきました。

月日を経て、<sup>かながわ</sup>神流川にあるかな川水辺の楽校運営協議会会長として河川功労者表彰をいただき、大変驚くとともに恐縮しております。

### 2. かな川水辺の楽校

群馬県藤岡市に、2010年に開校しました。

神流川は、群馬・長野・埼玉3県の県境、三国山に源を発し、下久保ダム下流から群馬県・埼玉県の県境となり、烏川に合流する利根川水系の川です。下流域の藤岡市の辺りから緩やかな流れとなっていますが、河道内にハリエンジュが繁茂し河原に降りるのは困難になっていました。

2004年、この水辺に市民手造りの藤岡パークゴルフ場ができ、いつも大人が集うようになった頃、すぐそばにある藤岡市美九里小学校に自然環境クラブができました。私は特別非常勤講師になり、環境を身近なことから考えようといつも子供たちと現場へ出かけていました。藤岡土木事務所は「多自然川づくり教室」、市農村整備課は「ほ場整備勉強会」を開いてくれました。水産試験場へ市天然記念物ヤリタナゴの採卵を見学に行き、個体

数調査も定期的に行いました。野鳥の会、日本チョウ類保全協会、ヤリタナゴ調査会の先生方や鳥川漁協もサポーターになってくれました。国交省高崎河川国道事務所が行なう全国一斉水生生物調査にも参加していました。

同年4月、その高崎河川国道事務所から「ここに水辺の楽校を創り、川と子どもを育て次の世代に残しましょう。地元から要望があれば、川に下りやすいようフィールド整備を行えます。」と提案がありました。地域の市民団体や地元行政、河川管理者が連携し組織する水辺の楽校プロジェクトでした。

翌5月、12の市民団体に出席していただき「水辺の楽校構想会議」を開き、まず水辺の楽校について研究を行うことが決まりました。自然環境クラブのサポーターや藤岡パークゴルフ協会を中心としたメンバーで先進事例の見学と会議を重ね、水辺の楽校運営協議会へと移行し、2010年7月、大勢の人々の心が集まり、「かな川水辺の楽校」として開校を迎えました。

せせらぎ水路、ワンド、林の散策路、親水階段、トイレ、駐車場などが整備されました。

開校式には美九里東小の全校児童が参加してくれまし



〈写真一〉開校式。手話の振り付けで歌を披露するサムエル幼稚園児。伴奏は理事長先生の指笛。(2010.7.5)

\*令和2年河川功労者表彰「第4号 河川の自然保護・環境学習・河川愛護等の活動に功績があった場合」(個人)

た。校歌を斉唱し、サムエル幼稚園児が手話と歌を披露してくれました〈写真-1〉。

川原にはたくさんの野生の生き物の中にカワラバツヤやカワヂシャなど当時は数種の絶滅危惧種が確認されていました。

式典後は2学年ずつ学年に分かれ、さっそく水生昆虫、魚類、野鳥、陸生昆虫の観察会を行いました〈写真-2〉。講師は運営協議会委員に加え、群馬淡水生物研究会、水産試験場、日本野鳥の会群馬の先生方が協力してくれました。



〈写真-2〉開校式。終了後、新しく整備されたせせらぎ水路で行った観察会の様子。画面の右奥に流れるのが神流川の本川。(2010.7.5)

開校式に挨拶させていただきました。

「今から6年前、2004年の春、この川原で自然観察をする美九里東小自然環境クラブの皆さんのお兄さんやお姉さんを見て、国土交通省高崎工事事務所から、ここに水辺の楽校をつくりましょう、川と子供を育て次の世代に残しましょうと提案がありました。

藤岡市の市長さんと教育長さんが賛成してくれました。自然や子どもたちを大切に思う人たちも大勢協力するといってくれました。

すばらしいことに、この川原にはたくさんの野生の生き物が住んでいます。住める場が少なくなり、絶滅危惧種と呼ばれるようになってしまったカワラバツヤ、アオハダトンボ、アカザ、シマドジョウ、カワヂシャなども住んでいます。

かな川水辺の楽校は、そんな小さな野生の生き物たちを大切に思う心、育くもうと思う心、そのような心が生まれる場になってほしいと思います。

今日はその心を持って大人になった大勢の皆様が集まってくださいました。

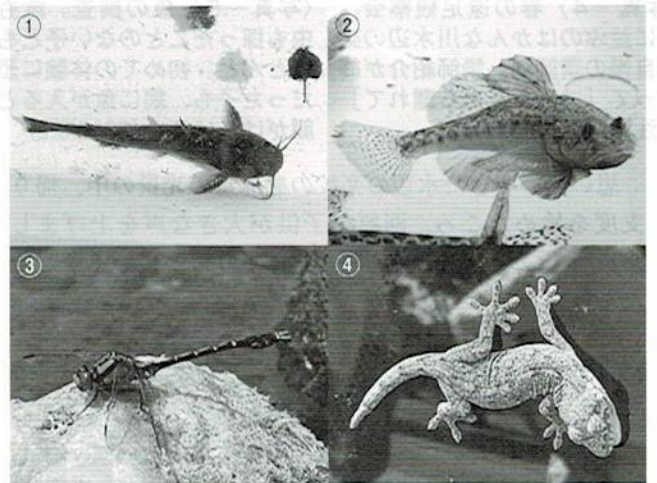
いつか美九里東小やサムエルのみなさんがその心を持った大人になって、ここにやってきてくれる日、その日を楽しみに、かな川水辺の楽校運営協議会は歩いていきたいものと思っております。」

開校して10年、市内小学校の春の遠足を受け入れ、水辺の生物に関する観察会、公開講座や水辺の安全教室を

開いてきました。

### ○生息する絶滅危惧種

2020年現在、当施設内には群馬県動植物レッドリストに指定されている希少種が15種確認されています。絶滅危惧Ⅱ類ではウキゴリ属の一種（ジュズカケハゼ関東型）、ギバチ、アオサナエ、ニホンヤモリ、トウキョウダルマガエル、準絶滅危惧種ではシマドジョウ、カジカ、キバネツノトンボ、アオハダトンボ、ギンイチモンジセセリ、ジャコウアゲハ、カワラバツヤ、カワヂシャ、ミコシガヤ、ミゾコウジュなどが生息しています〈写真-3〉。



〈写真-3〉施設内に生息している希少種の一部

①ギバチ ②ウキゴリ属の一種（ジュズカケハゼ関東型）

③アオサナエ ④ニホンヤモリ

（撮影：①小西浩司委員 ③松村行栄委員）

ジャコウアゲハが見られなくなってきたので、食草のウマノズクサを植えたところ、今年は幼虫やサナギを確認できました。カワラバツヤは、2012年5月水質事故の希釈放流以後、見られなくなっています。アオサナエは、開校時は確認されていませんでしたが、2016年にヤゴが初見され、その後毎年確認されています。鮮やかな緑色の斑紋が美しい中型のサナエトンボで、清流の明るい河川敷で見られますが、生息地は限られ、個体数の少ない種です。

春の遠足観察会で子供たちと見つけてきました。

### ○春の遠足観察会

開校した翌年の2011年5月、藤岡市立第1小学校4年生140名が、5キロの道のりを歩いてやってきました。運営協議会が誇る講師陣総動員で、大歓迎です。

遠足に来校する学校は次第に増え、2018年には3校合同となり、5月2日に約200名の子供たちと30名余の講師陣での大観察会となりました〈写真-4、5〉。

魚と昆虫の採集・観察に、パークゴルフ体験、川とダムのお話コーナーもメニューに加えました。パークゴル

フの講師には80歳代の方もいますから、10歳から80歳まで観察や体験、指導を通じて集えました。

第1回のこの日、天候にも恵まれ、さわやかな風のなか、「楽しかった！」という子供たちの声を何度も聞くことができた1日となりました。



〈写真-4〉春の遠足観察会。前に並ぶのはかな川水辺の楽校自慢の講師陣。講師紹介が終わって「マムシ見たら離れて」と注意 (2018.5.2)

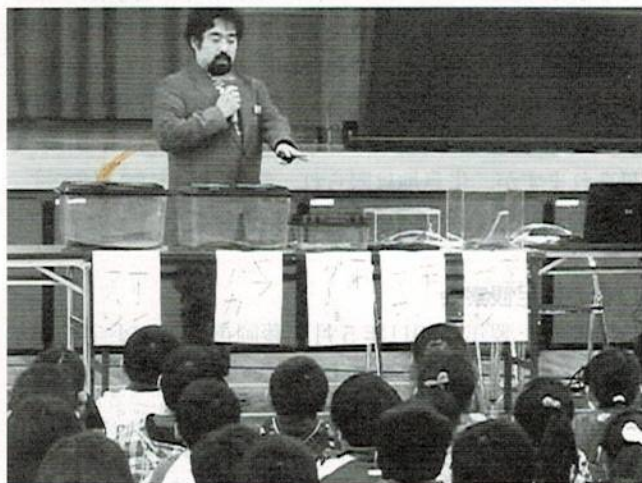


〈写真-5〉魚の調査。魚も昆虫も採ったことのない子どもがほとんど。初めての体験に恐々だった子も、網に魚が入ると笑顔がはじける。(2018.5.2)

思い描いてきた水辺の楽校の感無量の光景の中、帰り支度を始めたころ、河原で子供が大きな声を上げました。「ヘビがいる!」。怖がらずに走り寄っていく子どもたち。マムシでした。

#### ○「マムシの学校」

かな川水辺の楽校では計画時からマムシの被害が心配され、その対策については、懸案事項となっていましたので、開校後すぐに運営委員会で県内にある(財)日本蛇族学術研究所が開催する「マムシ対策研修講座」を受講しました。ヘビの見分け方、マムシなど毒蛇の生態、扱い方、咬傷の防止策、応急処置など、万が一咬まれてしまった時、どうしたらいいのか、またどのような症状が出るのかなどを学びました。いたずらに怖がったりするのはなく、正しい対応を取れるようになること



〈写真-6〉「第1回マムシの学校」。会場は遠足に来校する第一小の学校体育館。台上のケースには左から生きているニホンマムシ、ヤマカガシ、アオダイショウ。右2個は標本。(2012.4.23)

を目的としていて、マムシを捕まえる実習もありました。

遠足で初めてヘビを見た子どもたちは、珍しくて怖がりません。これは何とかしなければと、前述の研修会を、藤岡まで来ていただき、体育館で開いていただきました。「危険な毒蛇を覚えよう」。子供たちが「マムシの学校」と名付けました〈写真-6〉。

目の前にケースに入った生きているニホンマムシ、ヤマカガシやアオダイショウが入っていて、それを眺めながら「自然の中で危険を避けるためには、まず正しい知識を持つこと。そしてそれは野生の生き物たちの気持ちになって考えることへ...」という講師の話に聞き入っていました。来校する小学校を回り、地域の公民館、高校でも開きました。

開校して10年の間に、遠足で2回子供たちがマムシを発見しましたが、幸いなことに咬まれるなどの事故は起きていません。

#### ○川の安全教室「ライフジャケット体験」

夏休みに入ると、川では水難事故も心配です。交通事故の死者数は減少していますが、水難事故は減っておらず、命に係わる人が多いのです。

2016年から、ライフジャケットをつけて、実際に川を流れてもらう事業を計画しました。いざという前に、装着方法や流れ方を体験しておくことが大事だと考えました〈写真-7〉。

同時に、事故を防止するためには川の特長を知ることも大事ですから、「川のお話」を高崎河川国道事務所に、「ダムのお話」を下久保ダム管理所にいただきました〈写真-8、9〉。水生生物とバックテストで水質測定も体験してもらいました。

参加者の終了後の感想をご紹介します。「まず溺れないことが大切だと思いました。(小1)」  
「貴重な体験をさせていただきありがとうございました。本日の体験を生かして、これからは周りの子供たちの安全にも気を配ろうと思います。(高校生)」



〈写真-7〉川の安全教室。ライフジャケット体験で流れ方の指導。真剣に見ている子供たち (2016.7.27)

「親の私自身川遊び経験ゼロの為、川は怖いし近づかないと決めていました。今回体験したことで気をつければ安全に楽しく遊べる事がわかりました。また、ライフジャケットも、ただ着ればいだけでなく、正しく着る、川で流された時に適切な姿勢を取る等安全を確保なものにする為の決まりも学ぶ事ができました。天候と水量の話もとても参考になりました。

神流川の水質について、実際にいる生き物を見せていただき、こんなにも沢山の種類が住んでいる事、水がとてもきれいな事もわかりました。

川への怖さが払拭され、また行きたい！と思う事が出来ました。ありがとうございました。」



〈写真—10〉台風19号の後。洪水で防草シートがはがれた林の散策路。たくさんのオイカワなどが取り残されていた（2019.10.13）



〈写真—11〉台風19号の後。親水階段の上にある看板に流されてきた草木が巻き付いている。施設内はこのような状態となっていた。（2019.10.13）



〈写真—8〉第1回川の安全教室「川のお話」  
講師は高崎河川国道事務所  
(2016.7.27)



〈写真—9〉川の安全教室「ダムのお話」  
講師は下久保ダム管理所  
(2019.7.13)

「川のお話」と「ダムのお話」は、川の安全教室だけではなく、遠足、マムシの学校、生物観察会などでも、機会があればお話をお願いしてきました。

「サイレンが鳴ったら川から離れて！5回鳴るサイレン音は、神流川から離れてほしいという合図です。」  
(2017.7.29 夏休み川の安全教室)

「『群馬県安全神話』といわれていますが、施設では防ぎきれない大水害は必ず発生する、という認識を持ちましょう。」(2019.7.13、希少種観察会)

秋、台風19号がその通りにやってきました。

### ○台風19号来襲

近年は熱中症やゲリラ豪雨などで、夏の水辺の活動は難しくなっていました。

そこへやってきた2019年10月の台風19号は、下久保ダム緊急放流の可能性が報道されるほどの洪水で、かな川水辺の楽校も大きな被害を受けました。

増水した水はワンドのり面を突き破り、林の散策路を走り、地中に敷かれていた防草シートは大きくまくれ上がり、水が引いた後には、オイカワなどの魚たちが取り残されていました〈写真—10〉。

遠足や観察会を開いていたせせらぎ水路は、完全に崩れてしまい、施設中にもう再開は無理だと思わせる荒れ果てた景色が広がっていました〈写真—11〉。でも時間が過ぎ流量が落ち着いていった河原には、以前よりも多

様な流れや河原が出現していました。冬には初めてコハクチョウが飛来するなど、興味尽きない流水の世界。

同年11月末、かな川水辺の楽校運営協議会では施設内の状況を視察し、今後の対応について検討しました。その結果は「今後も今回のような台風で河川敷内は大きな乱があると考えられるから、その都度、自然によって施設内に新たにできた環境の中から観察に適した場所を、子どもが安全に遊べ、水に親しめる第2、第3のせせらぎ水路として、かな川水辺の楽校のやってきた事業を継続していく」ことになりました。

### 3. おわりに

かな川水辺の楽校は子供たちと一緒に、水辺の生き物たちを見つめながら、川で安全に過ごすことも考えてきました。

昨年の台風19号を経験し、ダムと堤防の想定を超える雨が降るような時代の川の安全は、ダムと堤防に守ってもらえるものではなく、流域に住む住民として普段から防災について心構えと準備と情報の共有が必要なことを実感しました。

大きな乱後の水辺の生き物たちの生息状況を見ながら、川にかかわる団体として、為すべきことを考えていきたいと思っています。